

## 「全鍍連」 2021年 9月号 巻頭言

全鍍連 情報・国際委員会担当副会長 山崎 慎介

(東新工業(株) 代表取締役社長)

「人生100年」



人生100年時代とは言うけれど、以前にもご紹介させて頂いた、横浜で会社を営んでいる友人の田中ちゃんのお婆様で福岡県在住の田中カ子さんと言う、ギネス認定の世界最高齢の方がいらっしゃいます。この原稿を書いている時点で御年118歳と7か月、未だに頭も聡明で健康な身体を維持されております。この5月には歴代世界最高齢の聖火ランナーとして福岡市内で聖火リレーを行う予定でした。コロナ禍の折でお孫さんたちに止められと言うか、無理やりが辞退させられ実現は出来ませんでした。予定では何と聖火リレーの100mをご家族が押す車椅子で運び、最後は新調したスニーカーを履いてご自分の足でトーチキスする予定であったそうです。このお婆様は1903年生まれ、ライト兄弟が人類初の飛行機を飛ばした年だそうで、1896年に始まった近代オリンピックとほぼ同じ年、前回の東京オリンピックは、既に今の我々と変わらぬ61歳だったそうで、今回のオリンピックが夏季、冬季合わせて実に49回目のオリンピックとなるそうです。ご本人曰く、まだまだ死ぬ気はせん、当面の目標は120歳、122歳の歴代ギネス最高齢記録も狙われているとのこと。お婆様の普段の生活については2019年5月号をお読み下さい。

お孫さんである友人も小生も、今年で63歳、お互いに良く話すことと言えば、還暦も過ぎ身体にもガタが来て病院通い、酒も弱くなったし、煙草も十分に吸ったし禁煙、ギャンブルもバカらしいし飽きた、オネーちゃんにもモテなくなったしクラブ活動も夜遊びもそろそろ卒業、風俗なんてもはや興味もない、BTSもNiziUも解らない、推しも居ないし、今更チューバーにも成れない、好きなゴルフは年々飛距離も落ち、エージシュートなんて夢のまた夢、趣味と言ったって何でも齧るだけの多趣味で、会社を第一に考え、仕事に没頭した結果、これと言って達人と呼ばれるような趣味は持ち合わせていないし、趣味の会にも入っていない、あと数年で後継者に会社を継承することも視野に入れながら、人生の終盤をどう過ごすか云々、飲むと事業承継を含め、そんなネガティブなことばかりを話す中で、お婆様の聖火リレーのニュースが飛び込んできました。

ちょっと待てよ、お婆様118歳6ヶ月と言うことは我々のほぼ倍の年、と言うことは俺たちが70歳まで仕事を頑張っただけで会社を息子に譲っても、お婆様の歳からしたら残りの人生55年、人生100年にしたって30年も何をしたら良いのだろうか？

とかく男性は、会社を引退すると世間との関りが薄くなり、会社人間、有能な経営者であった方に限って家事は出来ない、仕事人間で引退後に毎日没頭出来るような趣味もコミュニティもなく、暇を持て余し家に引きこもる、身体を壊す、

惚ける、奥さんに付いて回り嫌がられ、濡れ落ち葉族と化す、そんな方がこの業界の先輩諸氏にも多いでしょうし、私たちの近い将来に待ち受けている気がします。かと言って自分もそうだったように、第一線を退いた親父に経営のことに口を出されると歌の歌詞ではないが、息子としては「うっせい！うっせい！うっせいわ！」としか思いませんでしたし、皆さんも同じではなかったのではないのでしょうか？きっと息子たちの次世代も同じです。

これはもういっそのこと開き直り、特に数ある産業界の中でも結束が固く、仲が良く、仲間意識も強く、若い頃から何でも相談し、何でも言い合える、若い頃より青年部で共に切磋琢磨し、良く遊び、良く遊び、また遊び、時には良く学んだ仲間同士、いっそのこと人生の最後まで業界にどっぷり浸かり、最後までめっき屋としての誇り、人生を全うしませんか？昔、ドジャースの監督であったトム ラソーダ監督が「俺の身体の中には、ドジャースブルーの真っ青な熱い血が流れている」と言っていましたが、私を含め皆さんの身体の中には、ニッケル色のグリーンの熱い血や、クロム酸の熱い血が流れているのではないのでしょうか？みんなめっきが大好き、めっき業界が大好きなのではないのでしょうか？

そこで、今後はめっき組合青年部ならぬ、何歳からが老人であるかは問題ですが、会社を後継者に譲った老人同士で「めっき組合壮年部」、「めっき組合お達者クラブ」でも作って、業界のこと2割、自分たちの老後の楽しみ8割くらいの考えで、青年部の時みたいに熱く語り合い、共に遊び、若い執行部には口出しせず、老人なりに孫の代、更にその先のめっき業界の未来を思い、気の置けない仲間たちと幾つになってもお付き合い出来ればこんな幸せな老後はありません。世間からめっき業界の老人たちは不良老人、生き生きと絶えず集まって、遊んで楽しんでるよ。と驚かれる！息子、孫から尊敬される「熟メン」の集まりみたいなことが出来れば良いなあなどと、人生の第3コーナーで本気で考える今日この頃です。